

## 説教「拓かれた希望」 伊藤節彦 牧師

(2016年5月8日 昇天主日礼拝・F姉洗礼式)

## 【起】

今日が昇天主日、そしていよいよ来週はペンテコステを迎えます。

昇天主日、それは復活された主イエスが40日間にわたって弟子たちにそのお姿を現し、疑い、まどい、信じられないでいる弟子たちに、ご復活が本当であるということを繰り返しお示しになった後、天の父なる神の御許へと上げられたことを覚える日であります。



ルカの神学的特徴は幾つかありますが、そのひとつは歴史的順序を追って丁寧に書いているということです。そしてルカだけは二部構成で、福音書に加えて使徒言行録を書いています。

今日の第一日課は使徒言行録の始め、そして福音書はルカの最後の部分でしたが、この二つがぴったりと結びついていることはお分かりになるでしょう。ですから、ルカにとって主イエスの昇天の記事は、「終わり」ではなく教会の時が始まる「プロローグ」に他ならないのです。

ルカにとって、主イエスの昇天物語とは「イエス不在」という不安を克服する物語です。主イエスを中心にして形成されていた「仲間」はどうなるのだろうか。このまま教会の群れはバラバラになり消えてしまうのではないだろうか。ルカは弟子たちが抱いたであろう不安を共有しています。

先週、ルーテル教会では全国総会が行われました。色々なことが話合われましたが、地方の教会の多くは、自分たちの教会の将来に不安を抱えておられることが痛い程分かります。広島教会の皆さんは余り感じておられないかもしれませんが、同じ地区でいえば呉、松山、松江、高松、福山、三原そして西条や岡山でさえも危機的な状況なのです。

私たちにとって、教会とはいったい何なのか。私たちはなぜこの教会のために必死になっているのか。教会という重荷を下ろしたらどんなに楽になるのだろうか。そのような思いがよぎり、将来への不安が私たちを襲います。

## 【承】

今日の福音書は44節から始まっています。そこには復活の主を見ても信じられないでいる弟子たちの霊的な盲目性が示されています。45節には、そのような弟子たちのために、「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」下さったとあります。



私たちも同様であります。先ほど述べたような不安の只中にこそ、心の目を開いて頂きましょう。そして聖霊を与えて下さるよう祈ることを主は命じておられるの

です。主イエスによって、心の目を開いて頂かない限り、どんなに聖書を研究しようと、信仰に熱心になろうと、そこから平安を得ることは出来ません。救いを感じることは出来ないのです。

主イエスがエルサレムへと向かわれる途中、エリコでバルティマイという盲人と出会いました。バルティマイが主イエスに望んだこと。それは「主よ、見えるようになることです」という一点でした。そして見えるようになった目で、彼は主イエスに従っていったのです。



私たちが主によって教会に招かれ、信仰を与えられているのも同じです。主イエスは弟子たちに語られました。「あなたがたはこれらのことの証人となる。」

これは時制としては未来形ではなく現在形で語られているのです。もう既にあなたたちは私の証人として召されているのだと。そう今朝私たちにも語りかけておられるのです。

### 【転】

本日は、これからF姉妹の洗礼式を行います。Fさんも若いながら、人間関係に傷つき、心に平安のない生活を送る中で、このルーテル教会に導かれ、主イエス・キリストに出会うことが出来ました。F姉の洗礼名として、私はユウオディアというフィリピ教会の女性信徒の名前を考えました。この名前の意味は「香り」です。コリント書に「私たちはキリストの香りです」

と語られているように、この世の中に、私たちが遣わされて行くことで、そこにいることで、私たちを通してキリストの香りが届けられていくのです。



傷だらけの人間関係の中に、Fさんを通して和解と平和の希望の光が差し込んでいくように、そう願って選ばせて頂きました。

ユウオディアはフィリピ 4:2 にその名前が出て参ります。しかし、ここで名前が挙げられているのはユウオディアとシンティケという二人の女性です。なぜなら、この二人はフィリピ教会で熱心に奉仕の業を行っていたようですが、どうもよく衝突し、人間関係がうまくいっていなかったようなのです。そこでパウロがこの二人の名前を挙げて、「主において同じ思いを抱きなさい」と勧め、他の教会員に対しては「この二人の婦人を支えてあげてください」と勧めているのです。

そして、5節から次のように語るのです。「主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」

最後の言葉は、いつも私が説教の終わりに語る祝福の言葉です。この祝福が真実であるということは、主がすぐ近くにおられるのだ、という確信に結びついています。主が天に昇られたというのは、どこか遠く

に行かれたということではないのです。

主イエスは、手を上げて祝福しながら天に昇っていかれました。その場所をルカはベタニアの近くと記します。ここで思い起こしたいのは、ゲッセマネの園もこの辺りにあったということです。これは偶然ではないと思います。主イエスが十字架にお架かりになる前夜、血の汗を滴らせながら祈られた場所、それがゲッセマネの園です。この同じ場所から、主が天に昇られたというのは、この主の祈りが正に十字架と復活という出来事を通して聞き入れられたということ、弟子たちにハッキリとお示しになるためであったと思うのです。



同じように、信仰生活を歩む私たちにもゲッセマネの園があります。苦しみや困難の中で、真剣に願う祈りを神さまは聞き届けて下さらないように思える時があるかもしれません。しかし、主の昇天が示すように、私たちの祈りは必ず天に聞き上げられている。そのことを知る日が必ず備えられているのです。

【結】

天、それは苦難と死を味わわれた私たちの主、赦しの主が、父なる神と共におられる場所です。しかも、主は一度祝福のために挙げられた手を下ろしておられないのです。私たちはその祝福の主を仰ぎながら生きるのです。そして、その主を仰ぎながら死ぬことが出来る幸いを与えられているのです。

51~52 節には、弟子達を離れ天に上げられたイエスを礼拝し、弟子達は大喜びでエルサレムに帰ったと記されています。別れが涙や悲しみ・寂しさを超えて大喜びへと

繋がっているこの不思議。それは最後に見た、この祝福の主のお姿が心に刻まれたからでしょう。ここに既に新しい関係へと生かされ始めている弟子達の姿が記されています。「わたしはいつも一緒にいるわけではない」(マタイ 26:11)と語ったこの出来事が、逆説的に「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20)というインマヌエルの約束と結び合わされているのです。

英語の Goodbye は単なる「さようなら」ではありません。God be with you 神があなたと共におられますように、という信仰の告白と言って良い言葉です。ここに私たちの別れが、例え今生の別れになったとしても再会の希望へと繋がる根拠があります。

主イエスは弟子たちに「エルサレムから離れるな」と命じられました。それは、神の民の群れ=教会から離れないということです。教会こそが聖霊が満ちあふれるところだからであります。教会に聖霊が降り、あの物分かりの悪く臆病者だった弟子たちが、世界へと福音を宣べ伝える者となったその姿は、また私たちの今日の教会の姿でもあるのです。F さん、喜びと感謝を主なる神に捧げつつ、これからご一緒に主の証人として歩んで参りましょう。

人知ではどうも測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン

